蝶の雑記帳 139　世界はどのように在るか

現象世界に必然と自由とがある

2010 年暮れに故郷に帰って隠遁生活を始めた老人が、雑念を捨てきれずに 2013 年ころから、頭に浮かぶよしなしごとを雑記帳に書き留めることをやりだしました。そして、夜郎自大がはなはだしくなって、その雑記の分量が膨らんだものを書物の形にすることをためらわなくなりました。加齢が進んだ今では、畏れることを忘れてついに、尊敬するカントの哲学の重要部分を批判することさえ試みるまでになりました。その書き物がこの「雑記 139」です。物理学の研究者の端くれだった者には、カントが「可想的なもの」を導入する根拠がどうしても薄弱だと考えざるをえないのです。カントの『純粋理性批判』になんとかかじりついて、「可想的なもの」についての立論に聴き入って考察し、別の考え方があることを文章にしてみました。

カントの議論に対する理解が足りず、提出する論点も的確さを欠き論理の組み立ても適切ではないことでしょう。それでもこの考察がいくらか値打ちがあることを願っています。一人二人でも読んでくださる僥倖がありますように。

目次　予定

１．序説 3
　１A　現象世界 3
　１B　「必然」と「自由」 9

２　カント哲学が導入する可想的な理念
　２.2　現象界の必然と対比される可想的な自由
　２.3　現象世界と可想的理念の領野の切り分け
　２.4　自由と世界の出来事の根拠とされる理念
　２.5　カントの宇宙論的理念の体系
　２.6　カントの宇宙論的理念の体系　まとめ

３．カントの導入する自由に対する批判

４．科学的認識論での必然と自由

５．現象世界の・・・

現象世界に必然と自由とがある　　その１

「蝶の雑記帳 139」の１

１．序説

最初に表題がどんなことを意味しようとしているかを説明すると、この考察の意図が見えてくるだろう。

１A　現象世界

「世界」という言葉は、仏教用語にも現われ日本人の多くが思い浮かべる広い意味だとして出発する。ところが、今売り出し中の哲学者 M. ガブリエルが、その著作に『なぜ世界は存在しないのか』という意表を衝く表題を用いる時代である。世界という言葉になにがしかの輪郭を与える必要があるだろう。この考察で言う「世界」とは、人間が相対している対象全体を指しているとしよう。そして、「生きている人間は、自分が世界の内にいる」と考えるから、一般的な意味で、「世界とは、認識主体である人間と（当人を含めた）認識対象をひっくるめたもの」と考えることにしよう。

ここで註釈を加えれば、カントの認識論は、人間が「認識主体と認識対象の相対する構えとしてある世界」をどのようにして認識するかを理論化したものである。ところがカントの認識論を学習すると、「人間の能力では、世界を完全な全

体として認識することはできない」、と考えざるをえない。自身をふりかえって見ても、世界全体についてわたしがよく認識しているとは思えない。だから、人間は世界とはいかなるものかと考えるけれども、出発点においてすでに漠然とした「世界」というものを相手にしているのである。このことをよくわきまえておかなければいけない。ガブリエルの著書の表題は、人間の能力では世界全体を解明し尽くすことができないという難点を衝くものにすぎない。

あらためてカントの認識論に立ち戻って言い換えれば、「人間に知ることのできる世界は、経験的に観察できる（カントの言う意味の）現象界にすぎない」ということである。人間の知ることのできる世界を「現象世界」と呼ぶことができる。そして、カントの認識論からすると、その現象世界を解明し尽くすことはできない。限界をまぬがれないことを明確にするためにも、この論考では、世界に現象という言葉をかぶせて「現象世界」という言葉を用いることにする。言い添えなければいけないのは、カントが言葉に出して言及する「物自体」は、人間の知ることのできる「現象世界」に内包されないということである。

今イントロダクションとして述べ始めたことはカントの認識論に大いに依拠している。それは、―― 近代への過渡期に、カントの認識論は、哲学史上かつてないほど人間の認識と思惟を学問的に考察したもので、はじめて体系的に整序さ

れた哲学の基礎理論として提出された。そして、現代の人類に必須のものとなった自然科学やほかの科学的学問は、カント認識理論の骨格とその後に精緻化されたものとを研究の基礎に置いて発展してきた--、とわたしが考えるからである。

この論考は、そういう立場から、表題後半に出る「必然」と「自由」という概念について考察しようとする。しかも、大それたことに、カントの必然と自由の対比の仕方とそれに基づく哲学全般の構成の仕方に対して、なんとか批判を試みようとする。

この導入部で、本稿が考察する問題をもう少し明確にしておくには、認識理論と理性に関する哲学部門とからなるカント哲学の全体構成についてあらかじめ言及することが必要だろう。わたしの理解している範囲でそれを要約すれば、次のようになる。

――カントの認識理論では、人間の認識と思惟の能力は感性・悟性・理性の三つに分けられ、現象世界の諸対象を感覚器官によって直感し表象を得て、さらに悟性によってカテゴリーに分けて論理づけることで諸対象を悟性概念に整理して悟る（理解する）過程が第一段階である。第二段階では、推論・論理づけの能力である理性が悟性概念を操作・変換して、さらに精緻な関係づけをつくりあげて理性概念を構成する。その際、理性による思考が現象世界から離れすぎず悟性

概念を深化させているあいだは、理性概念は現実とのつながりを保って現実に対して有効だということができる。しかし、人間理性はどこまでも思考をやめることがない。しだいに現象世界から遠い理念を形成し、ついには現実から乖離した理想へと跳躍する。カントは、その跳躍を「超越」と呼んで、超越したむこう側から物事をとらえることを戒める。――

カントの主著『純粋理性批判』は、まず認識と思考の理論を構成し、次にその認識理論の基盤の上に、おおよそ上で述べた第二段階のことがら、つまりカントの言う理性の働きにかかわる問題を体系的に叙述しようとする。その理性に関する問題は、古来哲学者たちが主に議論してきた部門であった。近代哲学の波頭に立っていたカントは、自身の整理した認識と思考の理論に、さらに、古来の哲学者たちが議論してきた伝統的哲学を位置づけ整理しなおして加え、全体として新しく体系化した哲学を構成しようとしたのである。

岩波文庫版『純粋理性批判』三巻で言えば、おおよそ、上巻第一部先験的分析論が認識論に当たり、中巻第二部先験的弁証論が上で述べた第二段階に当たり理性の働きを論じる部分と言えるだろう。そして、第二部先験的弁証論は、認識論で整頓したことをさらにさまざまな視点から論じて、理性がもたらす理念・理想まで整理して示そうとする。

カントの哲学体系は、数学のヒルベルト空間になぞらえて

表現すれば、認識論の問題空間に理念の次元を加えて拡張したヒルベルト空間として構成されるのである。しかし、たいへん異質なものを結合してカントのつくりだす拡張ヒルベルト空間は、論理的に統合して議論することを困難にするほどの無理を含む、とわたしは思う。

まず、モノに注目すれば、認識論は現象世界を問題空間とするのであるが、カントは、それに人間には知ることのできない「物自体」という言葉を追加して、次元を拡張しようとする。ところが、知ることのできない「物自体」は空集合に過ぎず、それが加えるのは0次元空間であって、拡張されたとされる問題空間は現象世界のままだ、とわたしは考える。

第二に、カントは先験的弁証論で、「可想的なもの」という言葉をもちだして「自由」を現象世界の外に加えようとする。理念としての自由には概念上内容があるようにも思えるが、しかし、可想的なものである自由に実質的な内容があってヒルベルト空間を拡張すると考えるにはやはり無理がある、とわたしは考える。すなわち、可想的な「物自体」や「自由」が、実質的な内容をもつ現象世界という問題空間に、拮抗できる次元を加えて、統合的に議論可能な拡張された問題空間をつくりだすと考えるのはむずかしい、とわたしは思う。

それは形式的には可能なように見えるかもしれない。しかし、たとえば、量子力学のシュレーディンガー方程式は虚数を含むけれども、観測できる事象は、虚数が消去された形で説明されるのである。言葉による哲学の議論において、同様

に、問題空間の拡張を経由することで、現象世界での経験的な事象について有益な結論を付加することがはたしてできるだろうか。カントは、可想的な「自由」から現象世界での結果に至る道筋をつけようとしたのだが、現象世界の外にある自由が経験的な事象を乱すことなく結果をもたらすとする論理を言葉で厳密に提示することは結局できなかった、とわたしは判断せざるをえない。

もう一度人間の原点にもどって考えよう。カントは、人類史上はじめて、人間がどのようにして物事を知り思考するのかを、言葉にのせて理論的に整序して説明できるようにした。それがカントのなした最大の仕事だ、とわたしは考える。

カントをその仕事に向かうようにしたのは、ニュートンの『自然哲学の数学的原理』だった。感性が得る直感は空間と時間を形式として組み立てられるという考え方は、ニュートンの『自然哲学の数学的原理』なしにはありえなかっただろう。直感を悟性概念に仕立てるやり方は、過去の哲学者が考えてきたことだった。カントが以前よりも明確にしたのは、人間の悟性には、直感をカテゴリーごとに仕分ける能力とさらにそれを論理だてて（認識対象を特徴づけ述語で記述文にして）判断する能力があることである。そうして、直感が悟性概念に仕上げられるのである。そのようにして人間は、現象世界で、物事は事物が引き起こす事象として生起する、と認識するのである。

力学が開始した自然科学はカントが理論だてた経験的認識理論の典型的応用例であり、その認識理論が、逆にその後の自然科学研究の基礎理論となった。そして、カントの論理を突き詰める哲学的思考は、経験的な対象である自然物が条件づけられて存在し、条件をさかのぼってその先にある原因を探求するのが人間認識の原理であることを明確にした。しかも、条件をさかのぼる経験的な探求は、論理的な究極原因に到達できないことを論証した。カントの認識論は、自然科学の限界をあらかじめ示しているのである。こういう意味で、上述したように、人間の認識能力にとって世界は極め尽くせない現象世界なのである。伝統的哲学者がさまざまに論じてきたやり方は、現代の人類が到達したその基本原理から大なり小なり外れている、と言わざるをえない。

1B　「必然」と「自由」

本稿が考察しようとするのはカントがその哲学で主要な課題とした「必然」と「自由」との問題であるが、近代哲学を切り開いたカントにもこの問題の取り扱い方に古典的な論法が残っていた、と本稿は主張する。「必然」と「自由」とを対比させて概念規定をするときに十分厳密な議論が行われてはいない、と考える。また、「必然」は現象世界にあるとし、可想的な理念「自由」は現象世界の外にあるとして、現象世界とその外に架設する理念の領野とを統合した問題空間を設定する体系化には、上でも述べたように、十分な説

得力があるとは言いがたい、と思う。

それは、自然言語の基本に立ち戻って考えてみてもうかがい知ることが出来る。われわれの用いる自然言語で「必然」の対義語（反対語）は通常「偶然」とされる。しかし、あることが必然的にあるいは偶然に起きたと言うときには、出来事の生起はしばしば時間性を帯びている。特に偶然という言葉はそうであり、たいてい予期せぬことが起きたときに使われる。必然の方は、因果関係で起きるときに用いられ、やはり時間的に前後関係の出来事に用いられる。ただし、論理必然性は、時間を捨象できる関係において成り立つ。そうすると、現象世界の経験的な事象を時間性において観るときに、必然とでたらめ（偶然）が問題となるのである。他方で、現象世界の事象を空間性において観るときには、空間的な「秩序」と「無秩序（混沌）」が問題となる。時間と空間で規定される現象世界の事象は、時間的に必然―非必然と空間的に秩序―無秩序との二つの次元をもつということができるだろう。こう考えると、自由は必然の対義語としてあるのではない。

それなのにカントは、第二部先験的弁証論のところで、もっぱら「必然」に「自由」を対比して議論する。その理由は、カントが現象世界での事象を貫徹しているのは「必然」だと考えるからである。そして、一般に「自由」とは、何かから束縛を受けることがないことを意味するから、決まったこと

が必ず起きる「必然」が「自由」を束縛する対義語と考えられているのである。

世界の出来事は法則にのっとって必然的に起きるという考え方はカントだけのことではなく、西洋の哲学者はそのように考えがちであった。世界を汎神的にとらえたスピノザも、事象は必然的な法則に従って起きると考えた。粗く言えば、世界という神は必然的な法則として現前し、人間の「自由」はその必然性を知って身をゆだねるところにある、とスピノザは説いた。

こういう考え方では、「必然」という言葉は、世界の事象はでたらめではなく法則的に起きるという世界観と一体である。そうでなければ、世界をなんとか筋道だってとらえることができないだろう。人間にとって、「必然」という概念は生きていくためになくてはならない、とさえ言うことができるだろう。それにもかかわらず、人間は、自分に「自由」があると考えたいのである。しかし、世界に貫徹する必然をどうすることもできないと判断すれば、スピノザのように言うしかない。

それに対してカントは、世界に第一原因者となる絶対的最高存在者が存在すると証明することはできないと論証するので、スピノザのように「神」を「必然的な法則」の根拠にすることができない。それでも、現象世界を必然的な法則が貫くと考える。しかも同時に、「自由」は人間にとってなく

てはならないもので、「自由」についての考察を欠いて哲学を語ることはできない、と考えた。カントの関心は、実践において人間の自由を確保することに向かう。そこでカントは、先験的理性に基づく現象世界についての認識理論と矛盾せずに、実践理性が「自由」をもつとして、純粋理性と実践理性を整合的に統合できる哲学の構成・配置を提起する。

ところが、上で見たように当時現象界では必然が貫かれているという考えが支配的で、カントもそう考えた。しかも、現象界を貫徹する「必然」は例外を許さないほどだ、と考えた。だから、必然の現象世界に在る人間が実践においていかに自由を確保するかという問題を解くのに、「自由」を現象界の外に置くという方策をとった、と考えることができる。

スピノザが法則の貫く一つの世界しか考えないのに対して、カントは、必然の貫く現象界の外に自由のある可想的な領野を加えて、世界をいわば二重構造と見立てるのである。

ここでしばし立ち止まってみると、科学の進歩した現代世界に生きるわたしに、必然とか自由をそういうふうにしか考えることができないのだろうか、という疑問が生じる。

何か見つけたように思ったのは、『純粋理性批判』第二部（岩波文庫版中巻）の「先験的弁証論」の論述を読み進んでいるときであった。

実践理性についての深い考察はのちに著された『実践理性

批判』で行なわれたのだが、「必然」と「自由」の関係については『純粋理性批判』で論じておくことが必須であった。そこで、『純粋理性批判』第二部の第二篇「純粋理性の弁証的推理」のところでも必然と自由についての考察が現われる。議論は、純粋理性の働く場で「宇宙論的理念」についてなされているが、その「宇宙論的理念」は、理性が悟性概念を運用して到達した理性概念のことだとすれば、悟性の働きによって得られる「宇宙論的悟性概念」に根をもつ。事実、岩波文庫版中巻 201 ページに、「理念の根底に存する悟性概念」という言葉がある。そうすると、宇宙論的な悟性概念にせよ理性概念にせよ先験的に使用できるものではないとカントが言う（中巻 191 ページ）ことからしても、この「宇宙論的理念」は現代流に言えば経験科学である自然科学の知見に依拠する、と言うことができる。191 ページのすぐうしろの論述から推測すると、「宇宙論的理念」とは、理性が「宇宙論的悟性概念」に無条件的完全性を付加(要請)することによって理念に高めたもの、と言えるだろう。

実際、第二篇「純粋理性の弁証的推理」を読むと、「必然」と「自由」は、自然科学的な観点から考察されている。そこでカントは、純粋理性の働く場で方法的に最も厳格な数学と自然科学の認識に基づいて、必然と自由を切り分けている。必然と自由という概念は、まず、実践理性の領分と重ならないところで自然科学的に区別つまり定義されるのである。そうやってとり出した「自由」を実践理性の課題においても適

用できるものとしたいのである。そうすれば、カントの言う「自由」は、自然法則の「必然」に介入することなく、人間の実践活動において働くことができる。カントはこのやり方で、彼の哲学のなかに、純粋理性と実践理性とを互いに抵触しないように位置づけるのである、

そうすると、「宇宙論的理念」についてカントのした議論は、理念に高められる前の「宇宙論的悟性概念」がもっている経験的な規定に無関係であることはできない、というのがわたしの着眼点である。すなわち、そこでの議論はカントと同時代の自然科学の知見に影響を受けていたのではないか、という考えである。

そもそもカントの認識論は、自然科学に一大画期をもたらしたニュートンの『自然哲学の数学的原理』から重大な影響を受けて提起された。そのことは、カントの認識論の出発点に哲学史上初めて力学で前提とされる空間・時間概念が採り入れられていることが明らかにしている。同様に、「必然」と「自由」も、「宇宙論的理念」の根底にある悟性概念と無関係ではありえない、つまり、悟性概念を規定する自然科学の知識から影響をうけている、と考えてみることが許されるだろう。

ところが、カントの「宇宙論的理念」についての議論で、「範疇」と「論理」の運用のどこにも誤りがあるようには思

えない。一見、「必然」と「自由」の切り分けは至極当然と思われる。しかし、必然と自由について現代科学の到達している知見は、カントの時代の自然科学の知見と比較すれば、見過ごすことができないほど差異があるのではないか、という考えがわたしには生じる。というのは、現代物理学では、「法則」というものの「真理性」や、いくつもの階層から構成され階層間の関係も多種多様な自然現象における「必然性」というものに、古典的な論法で論じることがむずかしいほどの変化が生じていると思われるからである。もしそうなら、現代科学が高める「宇宙論的理念」の体系において、古典的な論法で二つの概念「必然」と「自由」とを切り分けて体系を組み立てることに十分な妥当性があるか確実ではなくなる。だから、そのことを検討しなおす必要がある、というのがわたしの頭に浮かんだことである。

それを考えるには、カントの『純粋理性批判』において「必然」と「自由」がどのように区別されているか、あらためて綿密に把握しなおさなければいけない。

2025 年 8 月立秋　　海蝶　谷川修